

赤堀 昭先生のご逝去を悼む

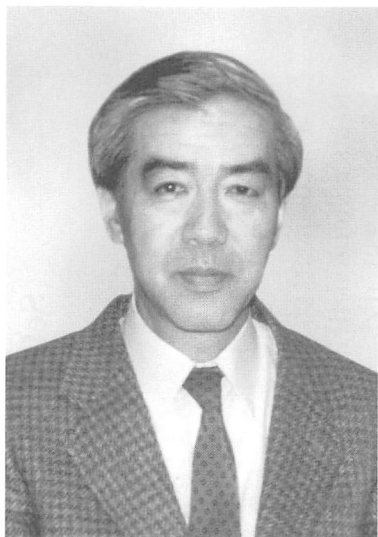
日本医史学会会員 鈴木 五郎

本会名誉会員・赤堀昭先生は、昨年平成十六年七月二六日長い闘病の末ご逝去されました。享年七十六歳でした。

先生は昭和二年十二月三日静岡県藤枝市で誕生された。昭和二十六年（一九五四年）東京大学医学部卒業後、大阪大学薬学部に入入学。昭和二十九年卒業後塩野義製薬株式会社研究所勤務。定年後 弊社小太郎漢方製薬(株)取締役研究所所長として来ていただきました。そのような関係もあつて、本会編集者代表の真柳誠先生の依頼を受け、以下赤堀先生のご業績を紹介させていただきます。

先生は医学部卒業後、薬品の研究を志し薬学部に入學され薬学博士を持つ（通常ですと薬学部卒医学部入學が多いと思うのですが）異色の経歴をお持ちでした。塩野義製薬にては医薬品研究を続ける傍ら、故岡西為人博士（第六十二回日本医史学会総会会長・第十四回日本東洋医学会学術総会会長を務められた）の薫陶を受けられた。それによって医学史の特に本草書関係において造詣の深さは認められるところであります。

岡西博士の最後の著作である『本草概説』（創元社）は、赤堀先生が昭和五十二年（一九七七）完成させたものです。その本の「あとがき」に「執筆を断念された博士が、筆者を呼んで、未完の草稿（鎌倉時代まで）を渡され、以後その要領で『明治前日本藥物学史』に収載



された「明治前中国本草の渡来と其影響」をもとにしてまとめるように依頼されたのは、四十八年二月京都大学結研病院に入院されてからのことであつた。(云々) また最後に「この遺著の出版の手伝いは、筆者にとつては荷の過ぎた仕事であり、その真価を損う結果になつたのではないかと心配であるが、この作業を通して啓発されるところが非常に大きかつた。同学に志すかたがたのお役にたつことを期待するものである。」とむすばれています。

先生の主要論文は「ステロイドサポゲニン含有の本邦産ヤマノイモ属植物の研究」、「神農本草経に記載された薬効」、「治法をめぐる問題」です。著書は『日本の技術4 漢方薬』(第一法規出版株式会社)であります。その他弊社に来ていただいてから、大塚恭男・室賀昭三・中田敬吾・江川充諸先生方と企画編集して『新漢方処方マニュアル』(思文閣、平成三年)の出版に尽力されました。

また薬局向弊社雑誌『協力会だより』に「漢方史探訪」と題して昭和五十九年から平成十三年まで病氣療養をしながら七十一回に亘つて二頁の平易な解説をされました。その第一回に「私が書くことは必ずしもこれまでの定説とは一致せず、一般に認められていることばかりとは限らない。といってもそれは根拠のないことではなく、成書に頼つていたこれまでの研究法を改めて一次史料を中心にして新しい史観を確立しようという最近の歴史研究の流れに沿うものであるが、医学についても近年新しい史料が発見され、それを検討した結果これまで定説のようになっていたことのいくつかについて考え直さなければならぬ時期に来ているからである。したがつて私はこの場をむしろ問題提起の場とさせていただいて、独断と偏見を混じえて現在まだ流動的な私の考えを述べ、それについて読者の皆様にもいっしょに考えていただいてご意見を寄せていただき、それによつて漢方発展の歴史のよりよい解明を目指したいと考えている。」と述べられています。別刷をつくつて知人・友人に送られておられました。その主な内容は「医心方・甲骨文・扁鵲・新出土資料・馬王堆漢墓・黄帝内経・漢代の医学・華佗・養生思想・寒食散・張仲景伝説・葛洪・陶弘景・諸病源候論・古代中国の医療制度・孫思邈・本草書・傷寒論・宋代の医書校勘・北宋の医学・成無己・南宋の医家たち・金の医学・金

元の医学・元から明へ・明医学漢方のルーツ・本草綱目・中国医学」そして「大陸医学の伝来」と日本編に続き最終「傷寒論物語一〇九」となっております。

ご法名は「深諦院釋槐風」です。ご冥福を心よりお祈りいたします。